

糖尿病網膜症の治療過程と就業

○佐藤茂、上野千佳子、澤田憲治、澤田浩作、
大浦嘉仁、大八木智仁、森田真一、坂東肇、
大喜多隆秀、池田俊英、恵美和幸
大阪労災病院眼科
勤労者感覚器障害研究センター

糖尿病網膜症治療と就業

就業継続による制約により
必要な治療を受けられない症例



治療へ時間を
割くと



高度の視力低下による失職



社会的要因による失職



就業と治療のジレンマ

目的

糖尿病網膜症における通院状況、治療状況と就業状況について調査し、糖尿病網膜症に対する治療と就業との関連を検討する。

対象

平成17年1月から平成19年10月の間に、
当科にて糖尿病網膜症の経過観察もしくは
治療を開始し、アンケート調査に同意を得た

508例

方法

①対象を調査開始時の治療状況により、経過観察群、網膜光凝固群、硝子体手術群の3群へ分類



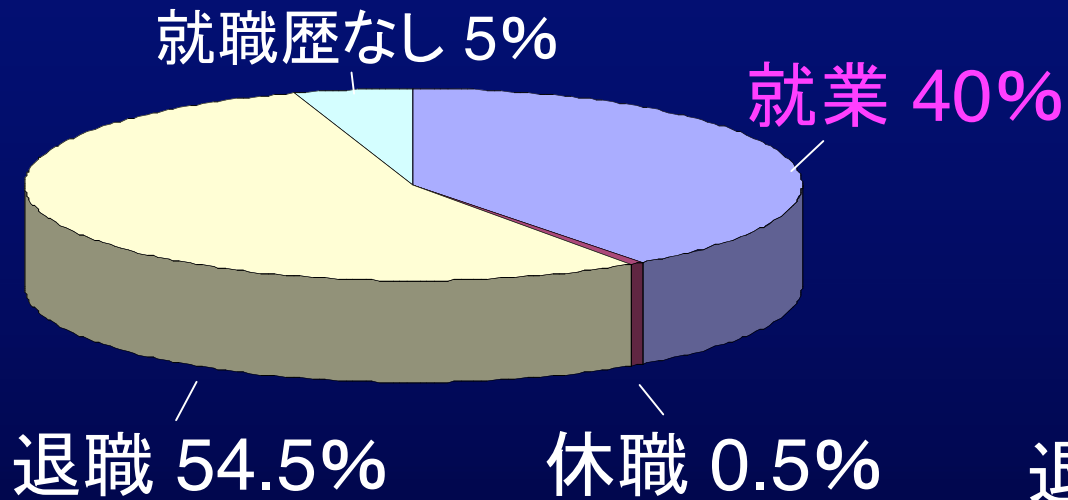
②調査開始時に就業しており、調査開始から1年後のアンケートが施行できた症例を抽出



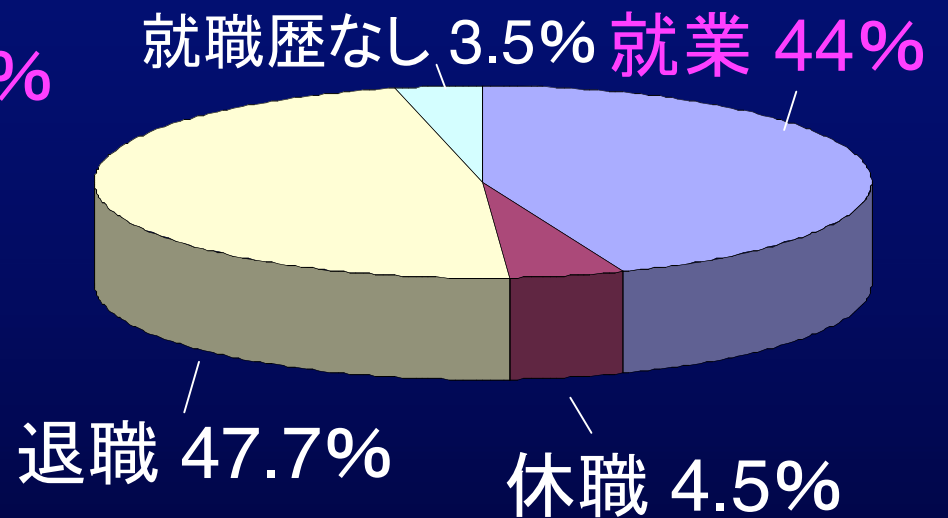
③矯正視力、糖尿病コントロール、就業状況の変化を各群間で比較

調査開始時における各群の就業者の割合

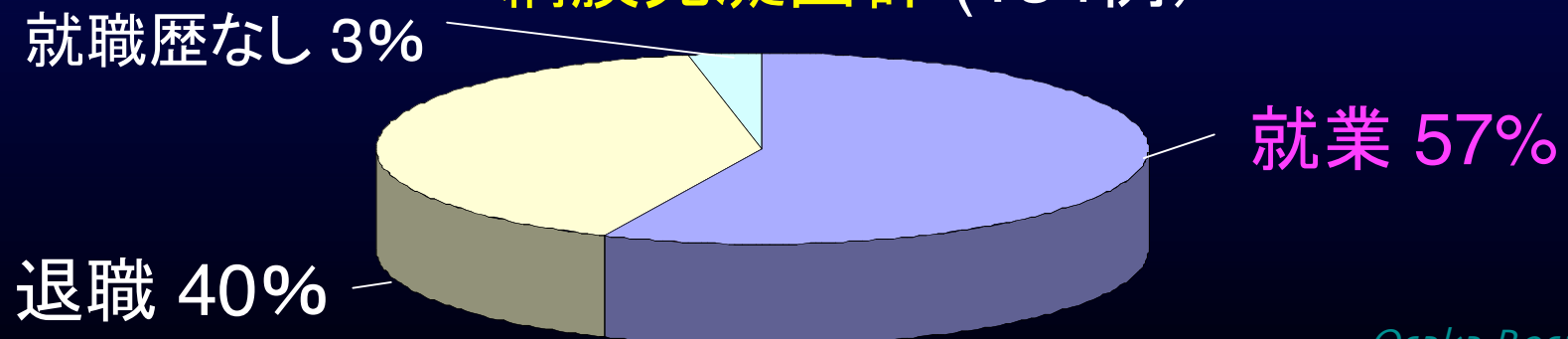
経過観察群 (202例)



硝子体手術群 (172例)



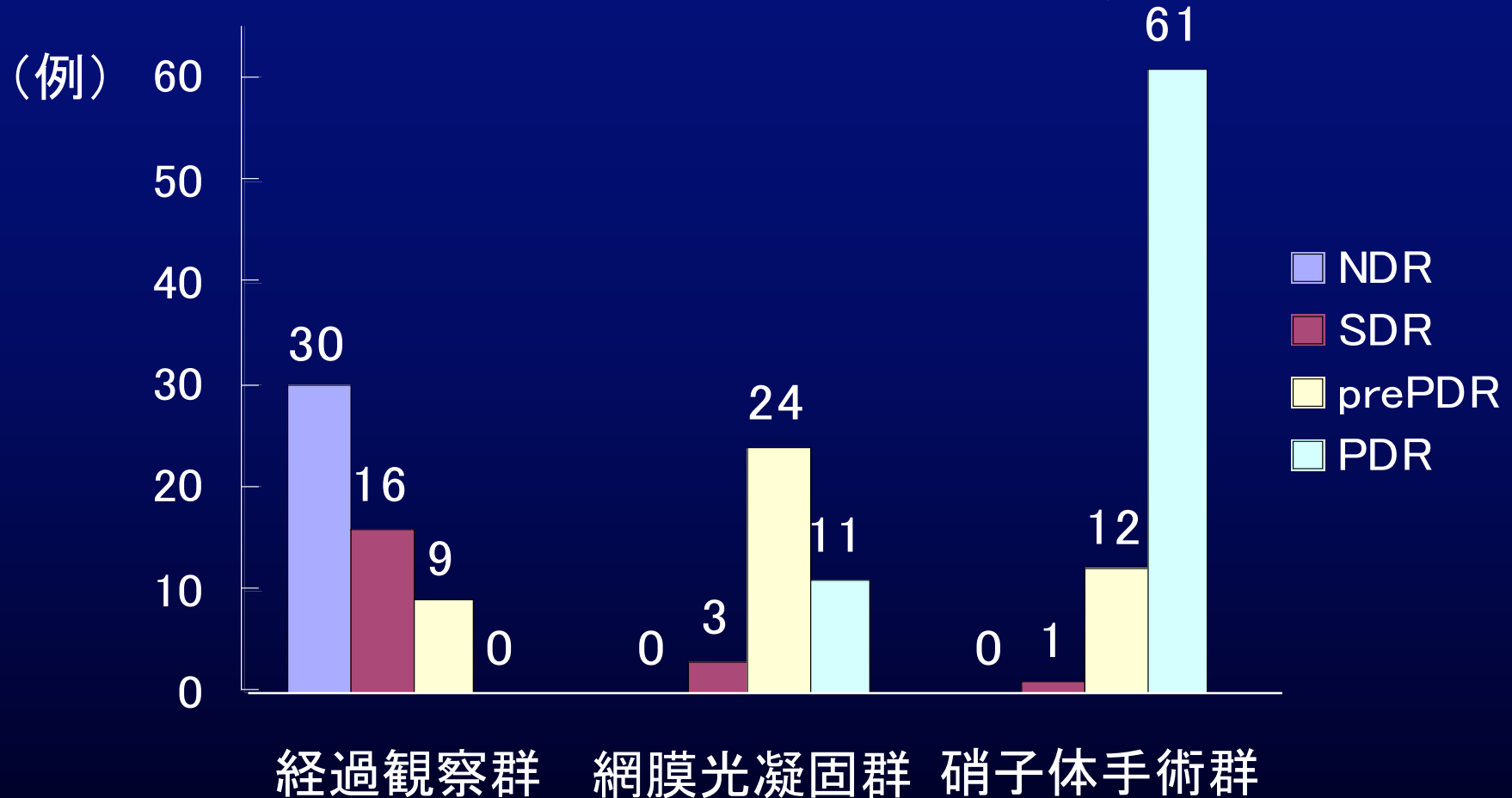
網膜光凝固群 (134例)



調査開始時就業
かつ
1年後のアンケートが施行できた症例

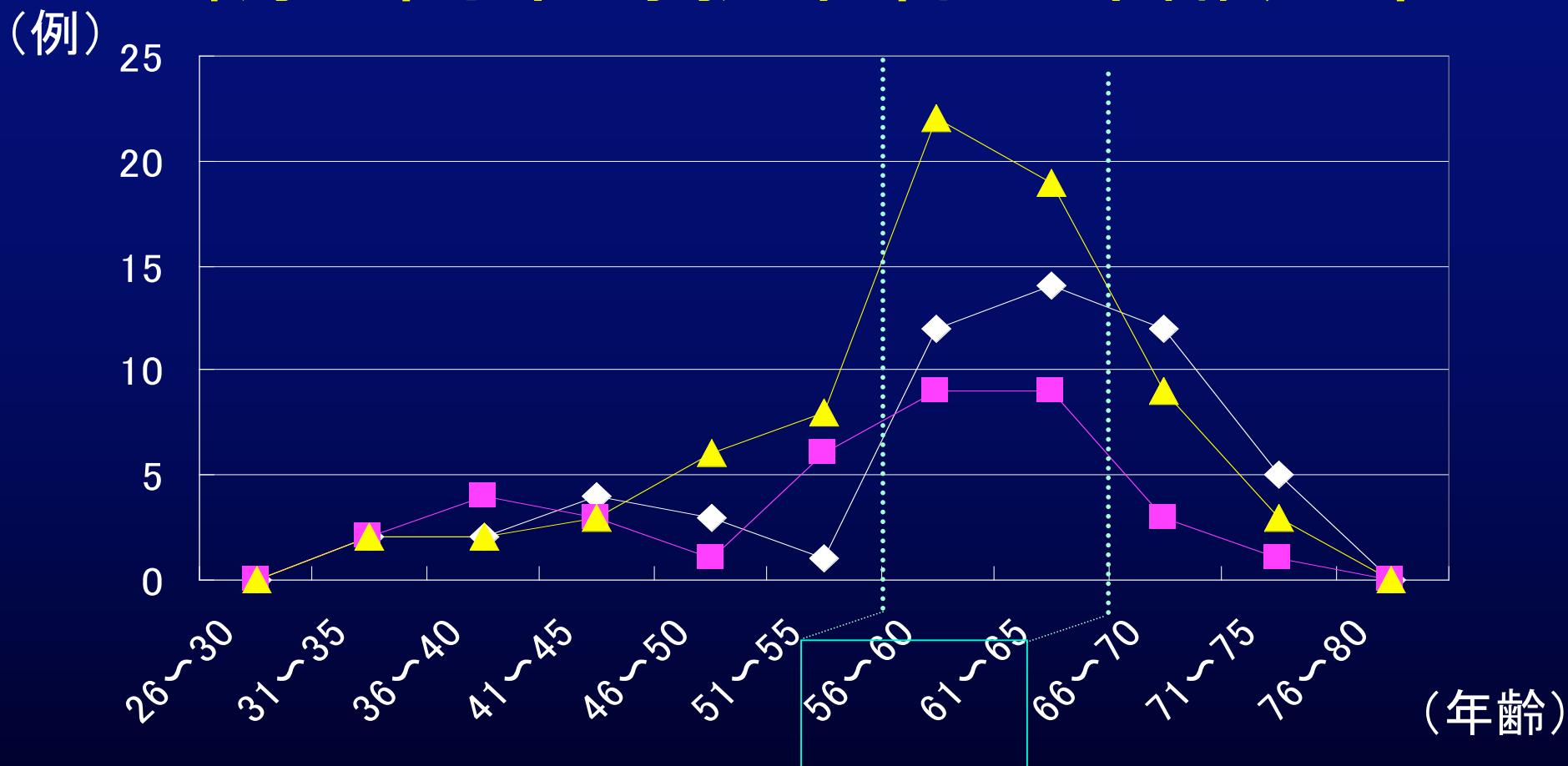
経過観察群	55例
網膜光凝固群	38例
硝子体手術群	74例
計	167例

調査開始時における病期の内訳



硝子体手術 → { 有水晶体眼・・・PPV+PEA+IOL
偽水晶体眼・・・PPV

調査開始時就業者の年齢分布



◆ 経過観察群
(55例)

■ 網膜光凝固群
(38例)

▲ 硝子体手術群
(74例)

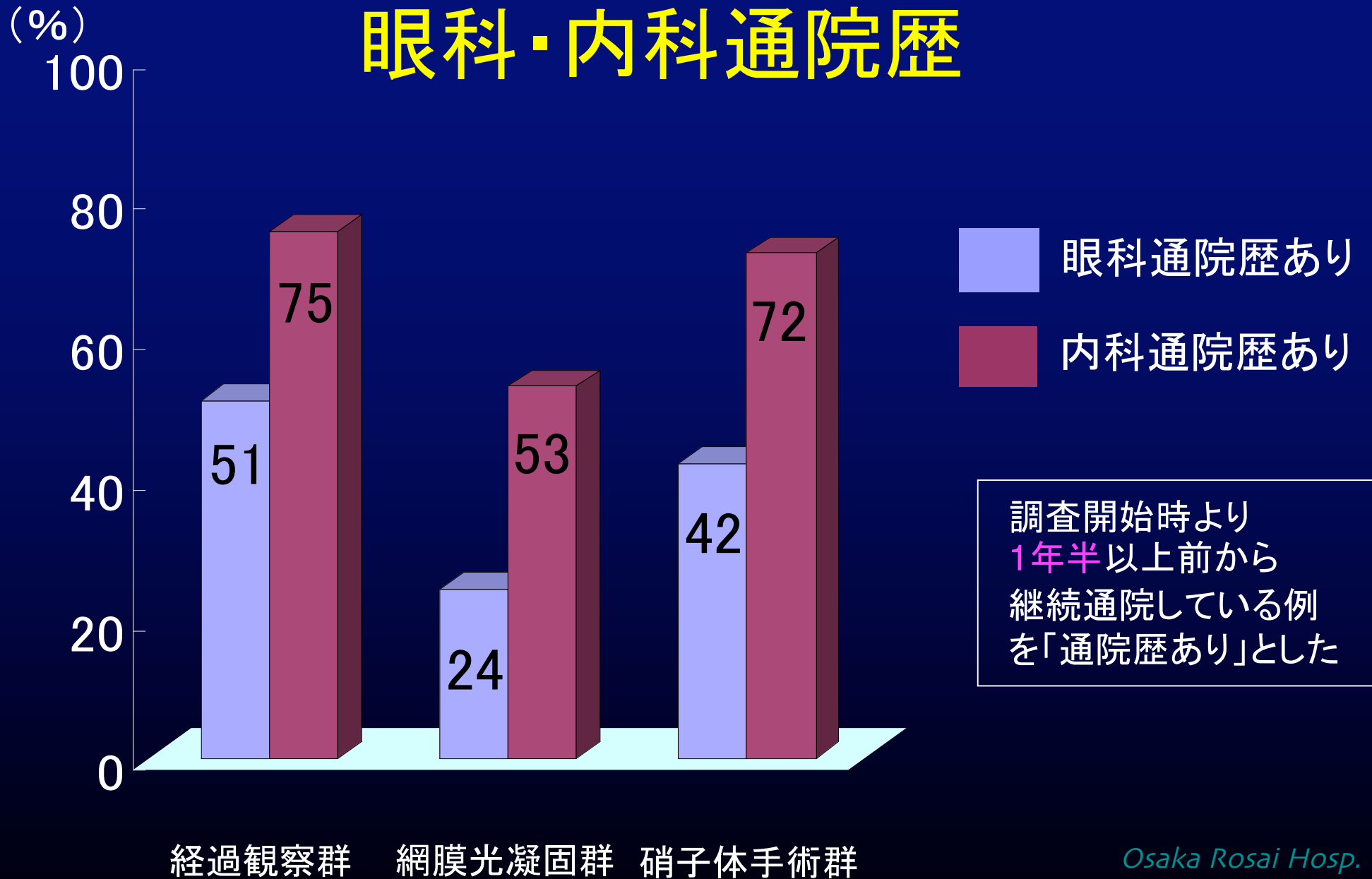
調査開始時における各群の背景

	経過観察群	網膜光凝固群	硝子体手術群
症例数	55例	38例	74例
性別（男/女）	47/8	32/6	51/23
年齢（才） ^{n.s.}	58.9±10.2	54.1±10.6	56.9±8.6
糖尿病罹病期間（年） ^{n.s.}	10.0±7.8	12.0±9.0	12.3±8.1
Glu (mg/dl) ^{n.s.}	187.9±93.6	196.8±97.5	178.4±72.8
HbA1c (%) ^{n.s.}	8.5±2.1	8.2±1.5	8.0±1.6
BUN (mg/dl) ^{n.s.}	15.3±5.7	16.0±6.1	18.0±8.7
Crea (mg/dl) ^{n.s.}	0.8±0.3	0.9±0.4	1.1±1.7
高血圧 (+) ^{n.s.}	38%	39%	47%

(平均±S.D.: n.s.; 有意差なし; Kruskal-Wallis test)

Osaka Rosai Hosp.
Department of Ophthalmology

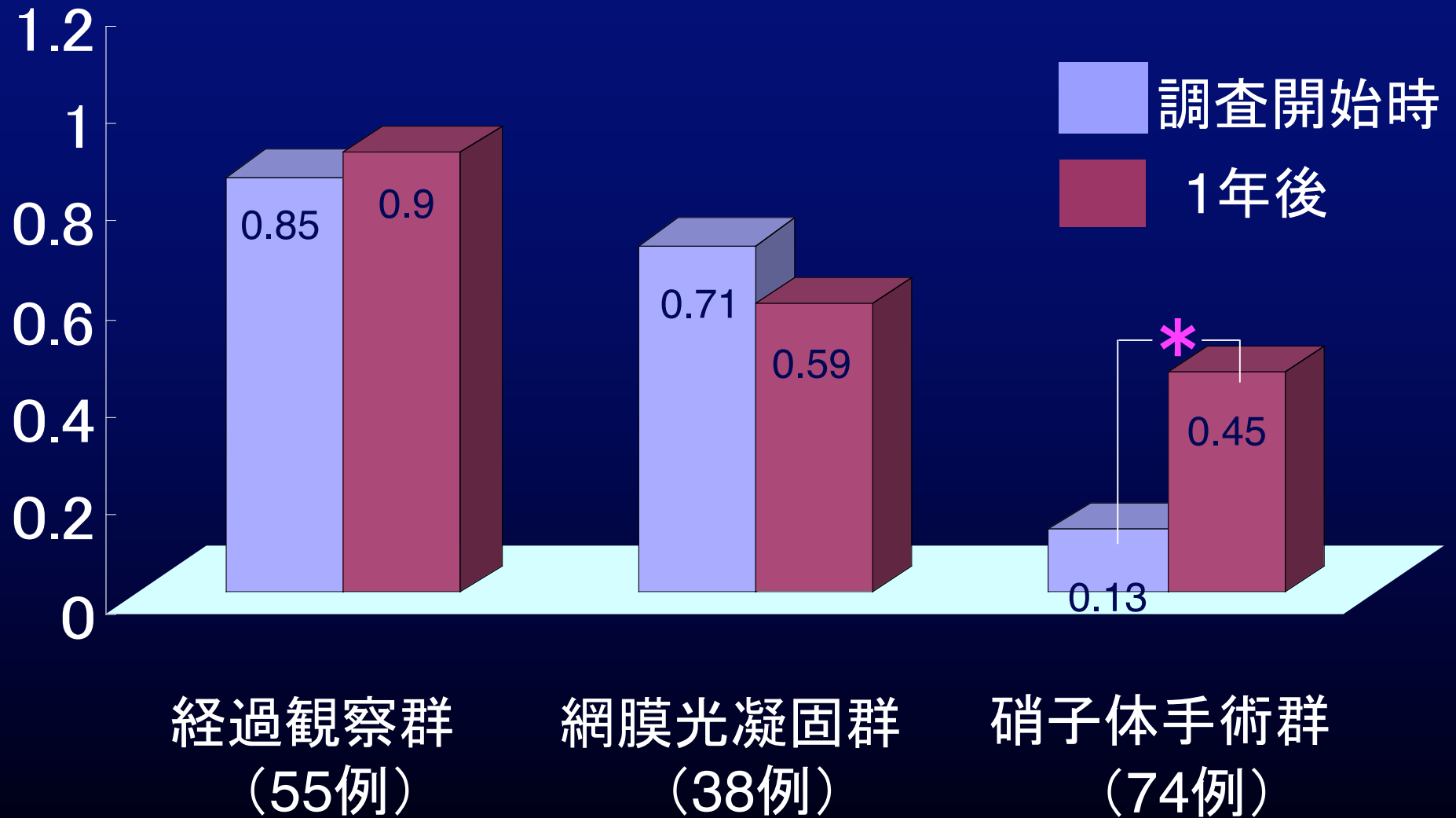
眼科・内科通院歴



1年間に治療段階がすすんだ症例

- 経過観察群 (55例) → 網膜光凝固 0例
→ 硝子体手術 0例
→
- 網膜光凝固群 (38例) 硝子体手術 1例

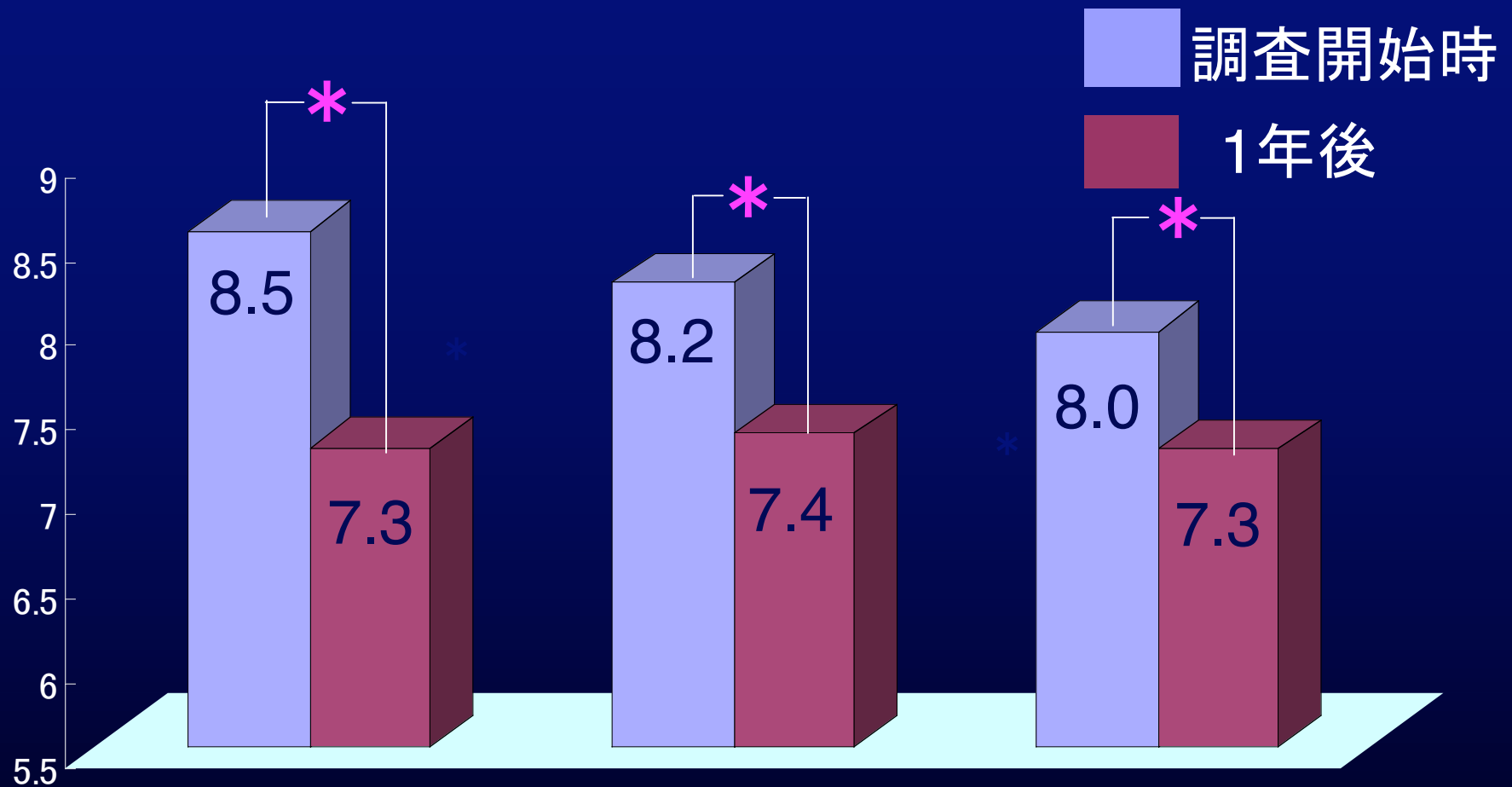
平均矯正視力の変化



(* ; Wilcoxon signed-ranks test; $P < 0.05$)

Osaka Rosai Hosp.
Department of Ophthalmology

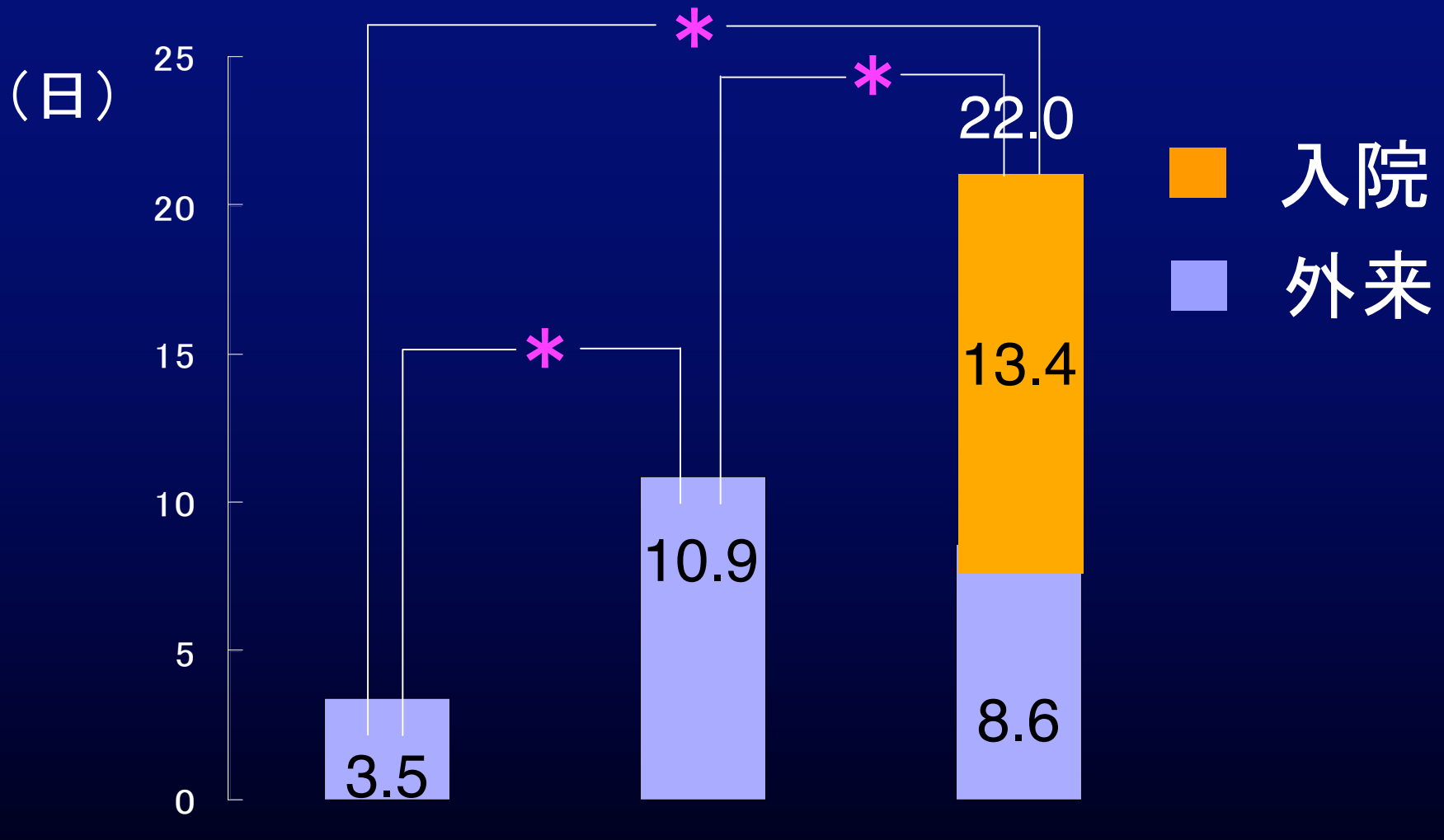
HbA1c値は全ての群で改善



経過観察群① (55例) 網膜光凝固群① (38例) 硝子体手術群① (74例)

(* ; Wilcoxon signed-ranks test; P < 0.05)

1年間の平均通院(在院)日数



経過観察群

網膜光凝固群

硝子体手術群

Osaka Rosai Hosp.

Department of Ophthalmology

(* ; Mann-Whitney's U test; $P < 0.05$)

1年間に退職した例数と退職理由

		眼	眼以外	健康以外
経過観察群	(n=55)	0	1	2
網膜光凝固群	(n=38)	0	0	1
硝子体手術群	(n=74)	4	0	1

眼の病気による退職者をさらに細かく調べると・・・

			調査時 (術前)	1年後	職種
症例1	60才男	対象眼	0.01	1.0	トラック運転手
		反対眼	0.8	0.8	
症例2	48才男	対象眼	0.06	0.7	トラック運転手
		反対眼	0.5	0.6	
症例3	60才男	対象眼	0.15	0.5	事務員
		反対眼	0.4	0.5	
症例4	59才女	対象眼	0.5	0.1	事務員
		反対眼	0.8	0.7	

就業者の1年後のアンケート未施行の理由

	経過観察群 (82例)	網膜光凝固群 (76例)	硝子体手術群 (84例)
未来院	20	2	9
他院での経過観察	3	1	1
ドロップアウト	2	0	0
その他(1年未満含む)	2	35	1
計	27	38	11

経過観察群の約1/4が未来院

まとめ1

- 就業者では網膜光凝固を必要とする状況になってはじめて眼科を受診する症例が多い。
- 内科を定期受診していても、眼科を定期受診していない症例がある。
- 眼科定期受診症例では、視力の維持・改善が得られており、糖尿病コントロール状態も改善していた。

まとめ2

- 治療段階が進むほど通院・在院日数が有意に増加していた。
- 眼の病気が原因で退職した症例は硝子体手術群のみで認められた。
- 今後、入院期間の短縮や早期視力改善を期待できる低侵襲小切開硝子体手術の重要性が増すと考えられた。